
聖女の丘

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女の丘

【Nコード】

N6779J

【作者名】

遼

【あらすじ】

聖女の奇跡を授かることのできるとされる街で生きる主人公、永坂啓一がそこにある未練にすぎると様々な交流を重ねていく。遺された武器「鏡」を操り、聖女のいなくなった街でただ渴き切った生活に身を委ね、そこに何を見出せばいいのか——そこに飛び込んでくる新しい異分子・黒沢茜や、元恋人の妹・御神楽桔梗らと共にそんな何かを守っていかうというそれこれ。

1. 聖女のいない街（前書き）

新連載↓未完↓新連載のループに陥りそうな予感がする新連載。
初めての異能物というか戦闘物ですが、完成できるといいですね。
よろしくお願いします。

1. 聖女のいない街

都市伝説の類はたいいていの場合科学の力で解明できるのだという。いやはやそういうものでもないだろうと思うが、科学が何を指しているのか厳密にわからない以上、俺にその説についてどうこう言う資格はないのだと思う。

俺の住む光ヶ丘にもそういう都市伝説は数多くある。例えば町外れの丘に深夜二時一人で出かけると帰って来れなくなるとか、市立の光ヶ丘高校第二校舎裏の焼却炉から人が出てくるだとか、ろくでもないものばかりではある。

それらすべての恐怖・不安を拭い去って余りある、いまだ全国に語り継がれるこの街の都市伝説——聖女の奇跡。

見たものは、それが女性であること、そしてすべての不運が嘘のように未来が希望にあふれたこと、ただそれだけを語り口を閉ざす他の何者にもいかんともし難い災いに見舞われた人がこの街のどこかで「独り」になること——それが奇跡の条件で、事実としてこの街で救われた人間はもはや数え切れないほどだ。

聖女は等しく愛を運ぶのだ。いかなる悪人も、いかなる善人も、いかなる咎人もまたいかな凡庸な人間であっても、彼女と出会ったそのあとにはまるで水を得た花のように微笑んだと言う。

聖女は等しく愛を説く。いかなる悪人も……すべてありとあらゆる生きる者に対してその本質を問い続けるのだ。

聖女は等しく何ものをも斬らない。故に無敵だった。

——そのはずだった。

——聖女の丘 1. 聖女のいない街

つまるところこの街は最悪だった。

いるわいるわ無法者の数ときたら電卓出さなきゃ数えられないほどで、芯の通った素敵なヒトだってたいてい「過激派^{タカ}」だ。「穏健派^ト」は飼い潰されるか哀れみ捨てられるかのいずれかにしか道がない。だから人は日に日に荒んでいくし、それとなれば街は荒れていくばかりだった。けれども法側の人間もまたタカであるからして、その次の日にはまたリセットされているという日常だった。

最悪だった。学校の制服かルーズな私服以外の小ぎれいな身なりを選べば百二十パーセント強盗に遭い、肩がぶつかれば大乱闘が起き、かんしゃく玉を鳴らせば機関銃で蜂の巣にされる——さすがに言いすぎだけでも、それくらい酷い治安だったのだ。

学校というのが普通でないのも当たり前。この街で戦い生き延びていくための手段を教えていく学校だ。それは格闘術であり多様な武器を操る術であり、狙撃から暗殺、果ては戦術思考までも徹底的に叩き込むカリキュラムが普通科で三年間。専門に渡れば更に三年などなど——それはもう異常極まりないものだ。

その中で更に異常を極めたのが「鏡」に選ばれた連中だった。別に神秘とかそういうんじゃない。脳が出す何らかの神経パルス——詳しくは知らないが、それを体外から読み取り増幅、「武器」を通じて現象させる科学技術の粋の結晶——それが「鏡」なのだ。とはいっても誰でも使えるわけじゃなく、電子工学的には極微弱であるはずのそのパルスが飛び抜けて高出力であるという適性が必要だった。要するに思い込みが激しいということであり、あくまでも武器

は工学技術であるから仕方ないこととはいえ……話を聞いたときにはいささかがっかりしてしまったのは認める。

とにかくもその「鏡」に選ばれた連中だけが入れる学科が「特別カリキュラム」であり、ほとんどの戦闘技術教習を免除される代わりに、各々の持つ鏡への適性をひたすらに高めることを強要される。その道のプロを教師に雇い――

――何言ってるんだか。その道のプロなんざ、この世界に独りしかいないってのに。

長々と講釈を垂れる教員を右目で見やって欠伸を漏らした。

特別カリキュラム高等部第二学年クラス二。その教室だった。窓際から外を見れば空は快晴、前庭の噴水はきれいに陽光を跳ね返して周囲の木々を照らしている。まったくもって平和そのもの、街の喧騒なんてものは無縁のものだった。そりゃあそうだ、ここは戦う場所じゃあない。弁えた連中が意外と多いんだ、なんて思うとおかしくて笑えてくる。

「永坂」

と、その苦笑が悟られたか、教員が俺を呼んだ。やれやれとため息、席を立った。

三十組の席にきっちり三十人、その六列五行からはぐれたような窓際最後尾のそこから、教員の顔は随分と遠い。あきれた顔をしてるってことくらいはわかるけどさ。

「お前は鏡も出さずに何を余所見してる」

端正な顔を歪ませることなく、ただひたすら冷酷に問う。美人が怒ると怖いっていうけど、あれって割と本当なんだなあとか場違いに思ってみれば、彼女は更に視線を強くした。

「鏡はもってきてません」

「……はあ？」

びくりと空気が震えるのを感じる。殺気とか視線とかそういうんじゃない、鏡はそういう威嚇行動の際のパールをも増幅させ、現実に見えるんだ。大体殺気なんてものがあるわけもない。それはただ相手

の情報と場の空気に飲まれた結果、負方向への自己催眠状態に過ぎない。だから彼女のそれに疎む理由などなかった。

「ここが何だかわかってるのか」

「特別カリキュラムですね。鏡がなきゃやってけない」

「わかっているなら」

「――わかってないんですよ。この中に鏡を使って生身の俺に勝てる人間がどれだけいます？」

「そういう問題じゃあ」という言葉と共に腕を振りかぶる教員。

その手には鏡「コナトウス」。指示棒の容をとってはいるが立派な武器だ。

「ないのよ」

振り下ろされる腕が空気を薙ぐと、指の一部が裂けたようにして剥離、白い軌跡を描いて俺の額へ飛んでくる。別に害意もクソもありやしないただの「デコピン」、甘んじて受けると、彼女はすぐに説教を再開した。この鏡という武器の特異性、強度、未知性、その他含め決して慢心の許されるものではない云々――

彼女の振るうコナトウス（自己存続衝動）は、彼女が彼女で在ろうとする意志が別の「彼女」を作り出し、それを物理的干渉手段として利用するもの――であるわけだが、要するに自分の肉体の枠を出ない、攻撃には向かない鏡なのだ。使い方次第、であることは認めるが、鏡使い同士の戦いでは補助以上の役割は望むべくもない。ただし補助という点では「さすが教員」。組めばまずどんな鏡使いにも負けはしないはずだ。

そんな彼女の説教はいつも長い。クラスメイトとはいっても「心臓が鉄でできてんじゃないのか」と冗談を交わしてるけど、まあそんな冗談もあながち嘘じゃないんではと思うほどの無表情だった。何しろ動じない、俺が話を一切聞いてないことをわかっていてもだ。

……意味あるのか？

「……という、クラスの皆さんへのお説教でした」

……なるほど。

無表情ながらも、懇切丁寧な講義とこういう微妙な茶目っ気、それから何よりもその美貌から結構な支持を集める教員だった。氷室^{ひむろ}錫^{すず}という名前の彼女は、今年で二十八、そろそろ婚期が危ういと評判の女教師だ。……女教師って聞くだけでなんかエロいと思うのは俺だけだろうか。

「貴方には期待してるのよ、永坂」

「光栄ですねえ」

「何しろ戦闘技術に関しては各専門課程においてもトップクラス。座学だって校内で十の指には入るわ」

「努力の賜物ですよ」

ええそれはもう、勉強と訓練ばかりしてましたから。

「……それなのに、特別カリキュラムに入ってから酷いもの。講義は聞いてない訓練はサボる、挙句の果てには」

「一度も鏡を持ってこない」とは、クラスメイト全員の斉唱だった。

ざわざわと喧騒が始め、「錫ちゃんいつも言ってるよなあ」

「あたしも見てみたいけどなー、永坂の鏡」なんて言葉が聞こえてくる。それをとがめることもなく、錫ちゃんは盛大にため息をこぼし、上目遣いに俺をにらんだ。なんだなんだかわいいじゃないか二十八歳。

「呆れたものよね」

「まったくです」

「貴方のことを言ってるのよ。なんでそういつもいつも他人事なの」
「情熱。それが圧倒的に足りてません」

「……ため息も出ないわ」

と言いながら嘆息する錫ちゃんに教室が沸く。

いやはや人気があるのも頷ける、いい教員だ。恐らくこの人でなければ講義に出席することだってなかったはずだと、今になって思う。そういう意味じゃあ彼女には感謝してもしきれないわけだが、いかんせん情熱が足りない俺には彼女の熱心さは毒だった。

そんなとき声が聞こえる——「やればできるのに、けーちゃん」

だから返すんだ——「そりゃあできないやつ言い訳だ。だからやらないんだよ、俺は」

天才だった。何をやらせても常にトップに立ち、鏡に対する適性も圧倒的、過去数十年遡ってもそこまでの逸材はいないと言わしめる、この街きつての天才だったのだ。だからこそあつという間に潰れてしまった。

楓。お前はいつ帰ってくるんだ——？

「もう座っていいわよ、永坂。それとも立ちっ放しが趣味？」

「勃ちっぱなしはいいですねえ」

「……座りなさい」

「あーい」

……勃ちっぱなしってやっぱ辛そうだな。うん、前言撤回しておこう。

学校が終わるとすぐに席を立つ、鞆は持たない。悪いか。

「宵越しの鞆は持たないのさ……」

「何言ってるのあんた」

歩き出そうとしたところにツツコミが入る。……別にツツコミ待ちしてたわけじゃあないんだけど、まあこの子が入れてくれたことに感謝しないでもない。何でも発言がスルーされるのってむなしなものね。

「今日も行くの？」

「ああ。何しろかわいいかわいいハニーが俺を心待ちにしてるからな」

「はちみつが？」

「……いや、うん、まあやることないからね、行くよ」

「あたしもついていい？」

うーんと考える素振りをするものの答えは決まっている。何しろただの丘だ、草木以外には花が少々風が少々、ごつごつした岩が少

しばらく露出して程度で他には何もない。彼女を連れて行ったところで何の問題もない、が、

「おもしろくはないぞ？」

「いいよいいよ、あんたのこともっと知りたいだけだもの」

「……これは遠まわしの告白……」

「いつか鏡も見れたらいいな。だっていつもあんた独りだもの」

華麗にスルーされたけども問題はない。こんなの慣れっこだ俺強い子。

さりとてあんまりゆっくりしていると日が沈む。黒板上の時計を見ると午後五時半、よい子は帰ってご飯を作り始める時間だ。俺には専属の家政婦さんがいるが、よい子であるところの彼女をあんまり待たせると何が起こるかわからないから、さっさと用事を済ませないと。

「んじゃあ、行くかあ」

「はいほー」

拳を振り上げいざ、よーそろー。

と、教室を出てリノリウムの廊下でひたひたと靴を鳴らしていると、喧騒が少ないことに気づく。何しろこの校舎丸ごと特別カリキュラムのために作られた特別製で、他のいかなる学科の学生も侵入を許されていないのだ。即ち特別カリキュラム主任「藤堂天音」の鏡、「四聖諦」による特定領域の保護——だが、まあ知ったこっちゃない。第一その鏡の力も詳しく知ってるわけじゃあなし、いかな推論をもってしてもそれは相手に飲まれるための先入観を呼び込む結果しか導かない。

何も気にせず目の前の敵を屠るだけ。そうしていれば敵はいなくなる。

隣を歩くこの子もそれを知れば俺の下を離れるだろうか。……いや、元々俺の傍になんざいちゃあないか。

「ところでさ」

「ん?」

「君、名前なんだっけ」

「……ため息も出ないわ」

いやだって思い出せないもの。クラスメイトのうち三十人は顔と名前が一致しないような状況で、突然話しかけられたこと自体に少し驚いてはいたんだ。結構クラスを中心にいるような、黒いポニーテールと軽く散らした前髪が快活そうな少女は、今もその表情でそれを体現している。かわいいじゃない。

「黒沢茜。ほら、これが鏡」

自己紹介と一緒に鏡を出すのがこの特別カリキュラムの慣習らしい。立ち止まり、スカートの中から取り出され彼女の掌に握られたナイフは、彼女の印象とは裏腹に随分エグい代物だった。柄の時点で既に十センチを超え、鏢がある時点でナイフの域を脱してる気はしたがまあ、それより問題はその刃だった。二十五センチばかりの銀の片刃には細かい突起がいくつもあり、その刃先に大きな返し——いかにもな毒物だった。

「ヒュギエイアっていうんだ。毒に見えるけど薬なんだよ、これ」

「……ええー」

「なーんでそんなに不満そうなの。刺したら薬が浸透するまで抜けない親切設計じゃない」

「……えええええー」

返しが五センチもあるようなナイフ、薬が浸透する前に血が抜けて死にそうだ。

「つと、それより気になってたんだが」

「ん、なあに？」

「それをもう一度試させてみせてくれ」

「……やらしいなあ、もう」

そうそう、そういえば何か気にかかるなあと思ってたら、彼女はこのナイフをどこから取り出してた、なんて疑問につきあたったわけだ。スカートの中、ふともも辺りにナイフ用のホルスターをつけてるらしい。なんとも健康的な白いふとももは、同じく健康的な男

子高校生の目にはいささか毒——いや、この上ない薬だった。

渋る彼女は結局俺の視線に負けてしまっただけだ。そりゃあしまわないわけにもいかないだろうとは思うが、何か悪いことをした気がする。気がするだけなので、まあ気にするまでもないだろう。うん。

再び歩き始めてすぐ、前庭へ出る。校舎は大きくはない。

石畳はよく磨かれて、正門と昇降口を隔てるようにして建つ噴水は講義中見たときと同じよう、平和を象徴するように平易な放物線を描いてそこにある。生徒の数は変わらずまばら、けれど特別カリキュラム以外の人間が混じり始めるととたんに空気が変わる。

制服自体が違うから俺たちを特別視する気持ちもわからなくはないが……露骨さに辟易して隣を見ると、彼女はそんな視線をものともしていないようだった。慣れって怖いね。

「そういえばなんで戦闘訓練あるのに、制服スカートなんだろうなあ」

女子制服は昔からあるセーラー服をちょっとばかり丈夫な素材で作っただけの、本当に簡単なものだった。男子だって同じく学ランのちょっと丈夫なやつだ。

「んー……いいんじゃない別に。パンツがどうのと気にしてたら死ぬしさ」

「じゃあ見せてくれ」

「……刺すよ？」

女の子って難しいね。

そんな調子でてくと街を歩き、ひび割れたコンクリートでたまに数メートル離れてみたり、遠くから聞こえた一発の銃声に「たーまやー」と言えば茜に呆れられたり、とにかくも独りでいるのは勝手が違うこと違うこと。

「制服着てれば安全、って、随分わかりやすい街だよなあ」

「弱い者しか狙わない。それがあんな種々のルールなのよね。それで均衡が保たれる」

まったく胸糞悪くなる話だった。

強い者はいつも生き残る。それが摂理だから「仕方ない」ことではあるけれど、所詮世の中に正義の味方などいないと実感するには十分すぎる事実だった。そうしてこの街は常に荒廃し、そうして常に均衡が保たれているのだ。余計な虫の寄り付かない、「聖女の伝説」のために生きる街——それが光ヶ丘だ。

それからは無言で歩き続け、俺の半歩後ろを歩いていた茜は到着した場所に少し驚いていた。

「なんで、聖女の丘に……？」

「……来ればわかる」

そこはなだらかな丘で、草木の他には少しばかりの花と風と、それから岩が出張ってるくらいしかない、唯一自然が息づく場所だった。黄昏時特有の「魔」を孕む空気と、それから赤く染まったそれらのあまりの美しさに息を呑む——まったく美しくて、ここで争うことは絶対的なタブーとされた。だから聖女の丘と名づけた。

頂上へ続く整備された一本道。生垣がそれを囲っている中、頂上の少し手前で生垣を飛び越えて裏へ回る。後ろから「待って」とか言いながらついてくる気配はあるが、まあ彼女ならすぐに追いついてくるだろう。裏とはつまり「他の街」を少しでも見ることできる、けれど誰もそこへ行こうとしない未踏の聖域。

巨大な壁。丘のふもとから少しのところに建ったそれは、他の街のほとんどを覆い隠し、あたかもそれこそが塀の中であるかのような閉塞感を周囲に与える。この街がこの街たる由縁——陸の孤島「光ヶ丘実験場」。

「……すごい景色ね」

「ああ」

彼女が追いついたのを確認してまた歩き出す。「もうっ」と憤慨しながらもまだまだといった感じで、彼女は今度は遅れないよう隣を歩いた。

目的地はすぐ。少しだけ目立ち始めた岩場の中央から少し頂上寄

りのところに、人が一人入るくらいの岩がある。その前で立ち止まり、それに手をかけると――

「ふぬっ」

「ごごと鈍い音を立てて岩がずれる。」

「ちょ……つと、なに、これ」

「行くぞー」

「あ、と、もう待ってよ」

その下にあるのは階段。暗闇以外に何もない空間へ続くそれに少し萎縮したが、茜は結局あふれる好奇心に負けてしまったようだった。

別に誰に秘密にしてたわけでもない。ここ自体は特に意味があるわけでもなし、たとえ暴かれたところで犯人に何のメリットもない場所だ。それくらいに何もない、岩壁を削ったような廊下と、その先にくりぬかれたような玄室があるだけの――ぽつりと立った整った岩塊に、これといった価値はない。

「――これは、お墓……?」

ポケットからイチゴ味のキャンディを取り出すと、その前にぽいつと放った。ぞんざいな扱いに怒る彼女の声が脳裏に響く。

「よう、楓」

驚くほど穏やかな声が出た。

言葉が溢れてくる。いつもそうだ。彼女を目の前になると自分の気持ちに壁を壊してぞろぞろと出てくる。抑えろ抑えろとどれだけ制してみたところで無駄も無駄、目からは涙、口からは言葉、腕からは鳥肌、脳からは熱を出して止まない。

飲まれたような音が聞こえた。……そうだ、忘れるところだった。それらはすべて一瞬で止まった。背後で面食らったような顔をしていた茜に向き直ると、これまた驚くほどに穏やかな声が出たのだった。

「ここは……お墓だ」

「あ……うん」

その顔が言っている。「――誰の？」

「御神楽楓って女、知ってるか？」

「あー……いや、知らない」

なんとなく聞き覚えがあるものだっただろう、返答は少しだけ迷いがあつた。

だから教えてやる。

「御神楽楓、享年十五。十五にして市立光ヶ丘高校総代を勤め、現役どころか歴代……いや、教師を含め彼女に敵う者はなかった。徒手空拳から武器、間接戦、暗殺術、医術、薬術、戦術等座学、鏡の適性も含めすべてにおいて光ヶ丘実験場のトップに君臨した女帝」

「……は」

それがどれだけ異常なことか、この街に住む者なら誰でもわかっている。だからこそこの墓にどんな意味があるのか、茜にはしっかりと理解しているはずだった。

「――潰されたの」

「ああ。光ヶ丘実験場のトップは数年単位で替わり続けるってのはまあ、常識だな」

だから無常だったんだ。

彼女は無敵で、彼女は何者にも屈せず、彼女はそう、決して何者をも斬ろうとはしなかった。

「聖女って知ってるか？」

「この街の人間なら誰でも知ってる。誰もが願ってる存在じゃんか」

「――こいつがそうだよ」

「――……あ、え、……え？」

御神楽楓の鏡「飾刀・水鏡」の真なる姿「聖刀・不見凶」こそが

かざりがたな・みずかがみ

ひじりがたな・みずまがつ

聖女の証。物理干渉をその旨とする鏡において特に異質、かつ異常際立ったのがその鏡だった。即ち他者の「凶兆」を斬る刀――斬られればたちどころに未来から災いが消え去るという垂涎の、あるいは不可侵の、それは聖女が持つに足る神器だった。

彼女を潰した人間は今もそれが聖女であったことに気づいてはい

ないんだろう。もはやこの街に聖女などいなく、争い続ける意味もないことに――

「そ、そんな、嘘だよ」

「嘘じゃないさ。楓が死んだ去年からさ、聖女の奇跡は報告されていないんだぞ？」

「……それは、何か事情が」

「……否定したい気持ちもわからなくはないけど」

いや、これが正常な反応だ。この街にいてこの街を出ない理由など聖女以外にありえない。いつかその本質にたどり着き、すべてを癒されすべてを許され、そしてすべてから解放されたいと願っているからこそこの街に強き者が集うのだ。そうでなければ、事業中止で取り潰されるだけの実験場跡でしかないここに、街ができるはずがないじゃないか。それもたった数年足らずでだ。

何も言わない俺に何を感じたのか、茜は腰を落としてしまった。

「そんな、じゃあ、今まで……今でも……戦ってる、意味って」

「いいんじゃない、戦うことで満足を覚える人間もこの街には多くいる」

「……どうして」

どうしてあんたはここにいるの。どうしてあんたは聖女のことを知ってるの。色んな質問を言外に匂わせていたが、答えは一つに収束していた。

「俺の恋人だったんだ。まだずーっと、好きなまんまだ」

「――」

「未練がましい無様なやつだろ？ それでもずっと……愛してるんだ、楓を」

ああ、笑顔が浮かぶ。

ただの幼い少女だった。喜び笑い、悲しみ泣き、あるいは怒りながらただ人生を楽しんでいただけの、普通の少女だったのだ。ただ笑顔だけは違った。それを見ると戦う気なんて失せてくるんだ。だから街にいても彼女を襲う人間は皆無だったし、それどころか彼女

の周りには常に笑顔があふれていた。荒くれ者が集うこの街で、「聖女の写し身」なんていわれたこともあるくらいだった。

——もういない。

「……まあ、ここに残って何がしたいかは俺もよくわかってないんだよ。ただ楓に対する未練だけ。だから学校にもずっと通ってる」

「あんた、潰されるよ……こんなの、隠してたら」

立ち直りが早い。さすがだと笑うと、茜は拗ねたようにため息をこぼした。

「あたしはあんたを無様なんて思わないよ。どいつもこいつもそうじゃなか、未練がましく聖女にすがってるからこの街にいるんだもの」

「はは……まったくだ」

「あたしも、まだ未練があるよ。だからまだこの街にいるよ」

「……茜」

「あたし、あんたにもいて欲しいな。こんなおっきな秘密、一人じや抱え切れそうにないもの」

……少し答えに窮した。

まったく情けないことだが、今まで友達の一つも作らずにいたのも、ひとえに楓を思ってたことだった。つまりこの街のどこかで「独り」でいること——そうしていればいつか聖女に逢えるんじゃないかと心のどこかで思ってたからだ。だから咄嗟には彼女への答えは出てきてはくれなかった。

なのに茜ときたら何も言わず笑って俺を見ているんだ。「何も情けないよ」「一緒に考えようか」「きっと逢えるよ」——そういう言葉で語りかけるんだ。あいつと同じ目でさ。

「……いいよ。俺も一人じゃきついと思ってたんだ」

「交渉成立ね。いきましよう、二人で」

すっと立ち上がって茜が差し出す手を、恐る恐ると握ってみた。ただ温かった。

守っていいこうと思った。——今度こそだ。

つづく。

2. 聖女の従者

周囲は面食らったようだけど、おおむねその事実も受け入れられたようだった。それは茜がずっと俺の傍にべったりなことで、茜が「友達」と笑うことに対してだ。

なぜ彼女が楓の名前にピンとこなかったのか、それは彼女が「外」から来た転入生だからだった。そうでなければ楓のことを知らない人間なんてこの場にいるはずもないし、その名前がタブー視されていることも知らないはずがない。恋人と街を巻き込む大喧嘩をして、仲違いしたまま街を飛び出していった――そんな楓は、それまでの評価を捨ててまで外へ逃げたよそ者になってしまった。ふと茜の口からその名前がこぼれただけで、その日の教室は見えていられないほどに暗たんとしてしまう……錫女史の説教を買ったのはまあ、愛嬌だ。

けれども茜は気にした様子もなかった。その日はぶすつと拗ねていたけれど、次の日にはまた快活なままで「おはよー」と笑ってくれたのだった。

楓の恋人と転入生。その取り合わせは皆の興味を煽るには十分すぎて、俺の周りには今まででは考えられないほど人が集まってきた。どうしてだろう。守りたいと思った。――茜のことを、楓と同じように。

――聖女の丘 2・聖女の従者

その日もあんまり喋りすぎてくたかった。他愛もない世間話がほとんどで、積極的に楓のことを話題にしたがる人間なんているはずもなかったが、ただ一人茜だけがその武勇伝に酔いしれていた。それとなれば周囲も熱くなって、楓の武勇伝の知る限りを、まるで自分のことのように語っていくのだった。――クラスが変わっていくのを実感した。

「しかし楓さんって人ほんとでもないね」

「ああ。なんで俺を選んでくれたのかもさっぱりだった」

「……そういうのは感心しないなあお姉さんは」

「わかってるよ。誰がお姉さんだ、誰が」

帰宅の途に就くにも茜と一緒にすることが多い。彼女が一人暮らしをするアパートが俺の家に近かったのもあり、自然とそういうことになっていた。学校から出て西へまっすぐ十分ほど、そこが彼女のアパートだった。

「ボロいなあ……」

「うっさいなあ。バイトでちまちま生活してるんだから仕方ないじゃない」

木造二階建て、柵や階段に使われた金属類はメッキが剥がれ錆が目立つ。うら若い女の住処に対するイメージを根こそぎ裏返してしまうには十分だった。とはいっても、部屋を見たことはないからなんともいえないのは事実だけでも……

「上がってく？」

と思っていたらそんな提案だ。

「やめとく」

当然だ。うん、女の子の家に二人きりとなると、うちの家政婦さんに何をされるかわかったもんじゃない。危険の芽は早いうちに摘んでおくのだ。

「まあ、そういうことなら、またねー」

「んじゃなー」

手を振り振り、踵を返すと後ろからドアの閉まる音。視界から消えるまでずっと見守ってくれとかそういう展開を期待してたわけじゃあないが……いや期待はしてたけども、少しばかり寂しいのは俺のせいじゃないはずだ。

ため息をこぼして歩き出す。今日もきっちり午後五時に終わった講義は変わらず、既に楓と一緒に修了してしまったから受ける必要はないはずだった。悪い気分じゃない。

茜の家からさらに西へ二分ばかり、ちょうど茜のアパートを一軒家にリフォームしたようなそれが俺の家だ。石塀の向こうから湯気が立ち上り、門の方へ回ってみればすべての灯りが煌々と点いている。まったく、あれほど電気代を無駄にするなど言っておいたのに。玄関の引き戸を強引に開き「ただいま」と大声を出すと、パタパタと木の廊下をスリッパで叩く音が奥から響いてくる。そうして俺の前に立ち止まった女性。制服の上に着けたエプロンで手を拭きふき、深々と腰を折った。

「おかえりなさい、あなた」

「……俺はお前の夫になったつもりはこれっぽっちもないが」

「冗談です。つつこんでください」

四六時中こんな調子だが、とにかくたおやかで女性らしい女性だ。それこそ婚前交渉を罪だと思ってる辺りが古風なほどだが、それはそれで好ましいことこの上ない。

小さな手で後ろ髪をまとめなおすと、女性――「御神楽桔梗」は改めて微笑んだ。

「おかえりなさいお兄さま。ご飯にします?」

「お前」

「……それともお風呂？」

「ご飯にします」

はいと笑って廊下の奥へ慌しく消えていく桔梗に苦笑が漏れた。変わらないなあ、こういうところもそっくりだ。銀灰色の長髪を愛用の髪留めで小さくまとめて、穏やかな垂れ目を少しだけ細めて微笑む姿はまるで生き写しだった。上背はないがとにかく引き締まった身体をしていて、全力で殴ってもまるでゴム、しなやかさの体現こそが彼女だった。

御神楽楓の唯一の肉親、妹の桔梗その人が俺の家政婦だ。学校にも通っているが、講義よりも訓練よりも家を守ることに執着した結果がこれだった。彼女は今も俺と一緒に守ってくれているのだ――楓の面影を。

玄関からまっすぐ奥へつきあたったところがリビングだ。少し焦げた香ばしさがもう玄関まで漂ってきている。我慢なんてできるわけがないな、なんて鳴った腹に苦笑して桔梗に続いてリビングへ。廊下と同じく、外観とはうって変わって洋風のフローリングで、インテリアも軒並み海外製のリビングは、楓の趣味で統一されている。

「座って待っててください。もうできているので、運びます」

「それくらい手伝わせない。暇で暇でエプロン姿のお前を襲っちゃうぞ」

「……ではご飯をよそってくださいな」

「はい」

こういう冗談にも慣れたもの、スルーされても寂しくなんてないもんねっ

ぺたぺたとしゃもじでご飯を叩きながらため息をこぼすが、決して寂しかったからじゃあないのだ。リビングと隣接する対面型のキッチンをせわしなく行き来する年頃の女性に思うところがないでもないが、やはり彼女は家政婦で、そして妹なのだ。

ため息だって出るさ、こんなにいい女がこんなところで青春を潰

してるんだから。けれどここは未練にすぎる人間が集う街で、誰も彼もがそこに寄りかかって生きているから、それを咎めることなんてのは決してできることではないんだ。あるいはこの街のすべての人間がこうやって誰かに――何かに従事しながら生きている。わかりやすい形がこの桔梗であつたというだけの話だ。

まったくやりきれない。ぺんぺんと山盛りのご飯の形を整えテーブルへ。これはちなみに俺の分でなく桔梗の分だ。

「……カロリー消費が多いからいいんです」

「それは誰への言い訳だ？」

「うるさい、お兄さま」

拗ねた口調に思わず笑みがこぼれる。こういうところも……いや止めておこう、今はそういう気分じゃない。

「桔梗、ありがとな」

「……いいえ、なんてことはありません」

唐突な礼に少し驚いて、それから少し怒って、すぐにすまし顔に戻る桔梗を笑うと、彼女はまた拗ねてしまった。

怒ろうとした彼女の気持ちは痛いほどに理解できる。礼を言うということは要するに「不安」や「負い目」の証だ。言うことで充足を得られるのだからそんなものはないのだという主張を否定するつもりもないけれど、かといって俺のこの主張を覆すつもりもない。本当に満たされ心から信頼していれば口に出さずとも礼はできる――俺たちはなおさらだ。だからそこには確かにそういったものがあるはずなのだ。

けれど俺たちは満たされていない。不安も負い目も抱えながら生きていく。だから礼を言うことに間違いはないし、桔梗もそんなことは承知しているのだ。けれど彼女は怒りを諫めてきちんとそれに向き合ってくれた。気まぐれにもそうして真面目に取り組んで、納得して、本当にできた娘だと思う。

「……もったいないな」

呟く俺の顎の下に刃物が滑り込んだ。左に瞳を動かせば、凍えそ

うなほど無感情な瞳が俺を捉えて歪んでいた。

「殺しますよ」

「できないな」

「でしたら言わないでください、そんな下らないこと。貴方の口から聞きたくない」

信頼されたもんだなと笑うと、包丁は引っ込んでいった。

残ったのは沈黙と、悲しそうな――不安そうな桔梗だった。震えた肩が痛々しくて、上目遣いの潤んだ瞳がどこまでも深かった。思わずその頭を胸に抱いてしまうほどに。

「いいんだな」

頷く気配と感触。

「ならもう言わないよ。……いや、何度もそうやってきたっけ……」
「学習、してください」

震えた声。けれど次には笑い声を含んでいて、ああ昔からこうされるのが好きだったっけなあと思ふ。あのときはこれは楓の役目だった。拗ねて泣いた桔梗をその柔らかな胸に抱いて、ほんの数秒あやしてやれば桔梗はこのとおりの笑顔だったんだ。魔法みたいだったな、あれは。

「姉さんに怒られそう。お兄さま、とったりしたら」

「兄妹愛の一環だろう。そんなことで怒るやつじゃないよ、楓は」

「……そうですね。優しい人だったもん」

それにしてもいつ触っても艶のある髪で、撫でていると癖になりそう。なんてことを意識したら急に額に熱が集まって、慌てて桔梗の肩をつかんで引き剥がした。面食らったような顔をした桔梗はそのあと少しだけ憤慨して、またしても拗ねるように夕食の準備へ戻ってしまった。

――何を考えてるんだ。あいつは妹だぞ――楓の大事な妹だ。そして俺の妹でもある。

荒く息をつく俺を氣遣う声が飛んでくる。背中を擦る柔らかな手にだいぶ落ち着いて、俺は一度だけ盛大な嘆息をこぼしてから食卓

へついたのだった。

桔梗を先に風呂へ入れて、その間に今日出た課題をすべて片すところだろうと彼女が風呂から出る頃だ。そうして入れ替わりに風呂へ入ったあとはリビングでしばしの談笑を重ねるのが、この家の慣習だった。あるいは約束事と言ってもいい、その日一日にあったことを嘘偽りなく話して聞かせるんだ。

ピンクの少しルーズなワンピースタイプのパジャマを着て、食卓の椅子に座る桔梗は、茜の話を聞いて少しだけ感心したようだった。「そうですか……姉さんのお墓に、クラスメイトを」

「悪かったな、勝手に」

「いいえ……いいえ、それはいいことだと思います。独りで抱えきれるものじゃあないですもの」

同じことを言ってる——なんて笑うと、不思議そうな顔もせず同じように笑ってくれる。何も言わずに伝わってしまう程度には、俺は桔梗を信頼している。少なくとも茜よりはずっとだ。

「今度うちに連れてきてください。ぜひお話してみたいです」

「ああ、明日にでも連れてくるよ。女だけど……」

「……ふふ、何を遠慮することがあるんです。お友達でしょう？」

——強調される「お友達」に背筋が震えた。

つまり「それ以上」は絶対に許さないのだという堅い意思の証明。万が一俺が茜に入れ込むことがあれば、十中八九桔梗は非情に身を委ね、殺してしまうだろうと思う。俺を、あるいは茜を……いや、もしかしたら二人とも殺されてしまうかもしれない。そういうものを含め、決して独りで抱えきれるような代物じゃあないのだ。

楓の妹、桔梗。鏡「かんぬきがたな・かげろうたち 閃刀・陽炎断」を繰る「暗殺術」のエキスパート——その腕たるや、俺の学年の武術課程トップクラスの男が、たとえ真正面から向き合ったとしても何も悟ることなく命を落とすと断言できるほど——それは楓の伝説を裏付けるほどの強固な、そ

れでいて異質・異常なほどの「血統」であった。

あるいは殺気というものがあるのならこれ以外には在り得ない。そう思わせるほどの怖気が脳髓から走り全身へと至る。

「お兄さま？」

その声で解けると、その動揺を悟られぬよう意識を張り巡らせ、今度はため息すらも律して微笑を作った。大丈夫だ、何も悟られない。

「楓も意外に嫉妬深いからなあ。いまだに頭上がんねえもん」

「ふふふ、姉さんときたら、お兄さまが少し女の子と話してるだけで飛んでいったものです」

懐かしむ声には喜色が溢れ、さっきまでの怖気はいつしか消え去っている。

多くの人間が殺気と称するのは、事前に知られた情報・あるいは肉体や言葉から見て取れるそれに先入観を抱き、それに飲まれた人間が感じるそういった怖気のことを言うのだと思っている。おそらく間違いはないだろうし、実際それを感じる人間に何度も出会ったことがある。

——が、桔梗はその比ではない。悟ることができないのだ。その怖気がどこから来るのか、何をする気なのか、どこを潰す気なのか、あるいは自分の意識が今どこにあるのかすら……すべてを見失いそうになるほどの圧力を、時折桔梗から感じる。決まって俺が楓の「何か」を否定したのだと誤解したときで、次の瞬間には俺は死んでいるんじゃないかと思うほどだった。

ありとあらゆる有象無象の頂点に楓が在る。だからこそ楓の中の一番だった俺は、こうして優遇されているのだ。——そんな俺が楓を否定するなど、桔梗にしてみればあってはならない事態だ。

今もかげることのない笑顔と言葉に相槌を打ち、俺の他愛のない冗談に声を上げて笑ってくれる桔梗。どこか危うさを孕みながら、決して揺らぐことのないその姿勢。だからこそ俺は桔梗が大好きだった。

「……あ、もうこんな時間ですね」

「ん、十一時か。桔梗と話してると時間過ぎるの忘れるなあ」

「お上手ですね」と上品に笑った桔梗は、すぐに席を立った。

「さ、寝ましよう？ 明日も学校でしょう」

「んだな。じゃあ、寝てる間も忘れずに。おやすみ」

——寝てる間も忘れずに。

おやすみの代わりだった。いや、おやすみもしっかりと言ってはいるから、それは枕詞のようなものだ。その前に必ずといっていいほど言わなければならない、楓を愛おしむ儀式だった。

「寝てる間も忘れません。おやすみなさい」

それは傍から見たら滑稽で、そうすることで自分に言い聞かせているようにしか見えないんだろうと思う。この言葉を言わずとも俺たちは……いやこの街の人間が楓のことを忘れるわけがないんだ。けれどそれとは違う、俺たちだけが知る楓の姿を、この家で、この家と共に守っていくこと——あるいは楓のことではなく、その面影を守るというその事実こそを忘れないのだという誓約だった。

リビングを出て階段を上がる音が聞こえたあと、冷蔵庫から麦茶を取り出してグラスに注ぎ、一気に呷った。

「……殺される、いつか、絶対」

握り潰されそうになっていた心臓を解放された気分だった。今頃になって吹き出てくる冷や汗で、圧倒的な実力差の前に飲まれているのを自覚できるほどだった。

だが家を出ない。俺は桔梗を守っていく。ありとあらゆるすべてから、——楓と同じように。

訓練の肝は何といっても鏡の適性を上げていくことであり、それこそがあらゆる戦術への適性を上げることへ繋がっていく。即ち自己意識の改革、および補完・補填といったものが肉体へ及ぼす影響こそがその要だということを皆知っているからだ。精神と肉体

が一定以上繋がる、という事実はおおよそ一般人においても同じではあるが、鏡を持つ人間——つまり「陽炎」と呼ばれる俺たちはその点において殊更顕著だった。

つまり脳の出す信号が強すぎて、肉体はそれに過剰な対応をしてしまう。右足を動かす——という命令に対し右足は五メートル先へ進もうとする、といった具合だ。それを制することが即ちあらゆる戦況へ対応することのできる絶対的な肉体強化となりうる、ということだった。

以上、錫ちゃんのわかりやすい陽炎講座から抜粋だ。

「皆さんの鏡は皆さんの最も強い意識と適合しているはずよ。なぜならそういうものしか扱えないように作られているから」

そうそう、あの人もそう言っていた。その上で理想として目指したのが——

「例えば私の鏡はコナトウス——自己存続衝動と呼ばれる哲学用語なんだが、自分で言うのもなんだが私はプライドが高いんだ。肉体的精神的に常に自分の理想をそこに強いている……今ここにある私こそが私であると……いやまあ、そんな小難しい話はどうでもいいが、とにかく各自そういう意識が必ずあるはずだ」

……どうかな。そういうのを枠内って言うんだ。

「転人生……黒沢、お前の鏡は自分の意識の何を現しているのだと思う？」

「……冒したい。全部全部、ありとあらゆるものへ自分の意識を溶かし込んで、すべて犯してしまいたい」

……これは意外だ。快活な女の子からこんなドロドロとした言葉が出てくるなんて、と驚いたのはいいものの、それを咎める人間がここにいるはずもない。そうして真っ黒な自分を受け入れられない人間はすぐさま淘汰される、なんてことはある種常識だからだ。

すべてと向き合いすべてを受け入れ、そしてすべてから逃げているからこそ陽炎としての資格を得た。そういうことだ。

「ヒュギエイアの杯——薬学のシンボルだ。うむ、それ以上の答え

はないだろうな」

「はい」

笑顔で頷き合う二人に、今更ながらこの街の異常性を悟る。俺もこいつらの仲間なんだよな……なんて思ってた笑うと、錫ちゃんはタ―ゲットをそんな不届き者にと定めたのだった。

「お前の鏡は一度も見たことがないが、説明すらできないか？」

「いやあ……聞いたところで理解できるかどうか」

そもそも、秘密です、なんて言った覚えもない。

「言ってみろ」

「俺の鏡は……ほとんど茜のと同じ説明になりますかね。相手に侵食してそのまま食いつぶすタイプですよ」

「ほう――？」

「俺のパルスを、鏡を通して相手の脳に忍び込ませて、そのまますべてのパルスを俺のそれに書き換えるだけです。拒絶反応を起こした相手はそのまま精神を壊され廃人一直線、って具合です」

元々脳波は個々人で大きく違うから、他人のそれを自分の脳で扱うことなどできるはずがない。俺の鏡はそれを無理矢理扱わせるわけだから、身体中で拒絶反応が起きてまず全身が麻痺状態に陥り、次第に脳がその異常に気づき新たな信号で対応するが、それが新たな拒絶反応を呼び――要するにアナフィラキシーショックのようなものだ。

「それは……お前」

「ええ。楓のものとよく似ていますね」

クラスのざわめきが一変する。楽しげに茜をはやし立てていたクラスメイトの視線が一度に集中して、その目を細く尖らせた。

「というよりは、それこそが『飾刀・水鏡』の境地なんですよ」

「……」続けると言外に促される。

「ありとあらゆる脳波に対応する、つまり陽炎であれば誰でも扱える鏡の製作者の理想形です。プロトタイプとされたのが楓の持つ『飾刀・水鏡』です」

「馬鹿な。ならなぜそれをお前が持っている」

「誰も俺が持つてるとは言ってますよ。俺が持つてるのはそれに到達する段階で気まぐれにできた失敗作です」

驚く錫ちゃんの顔を見て、――ああ、思い出すなあ、あの人の苦々しい顔。

――「ああ、ダメだダメだ、くっそ、こんなんじゃ救えねえぞ」

――「今度は何だよ？」

――「おお啓一、また失敗だよ。これやろうか」

――「失敗作掴ませるなよ、兄ちゃん……」

――「失敗作つつつても鏡としちゃあ相当だぞ？　長距離攻撃ができるわけじゃあないが、単純な攻撃力だけを見れば現状最強と言っている」

――「……完成したら楓にあげるつもりのか」

――「拗ねるな拗ねるな、男なら好きな女に譲るくらいの度量を見せろ、お前は誰の弟だ」

――「くっそ、楓の名前出すなよ、卑怯だぞ」

――「はっはっは、俺はそうさ、負けたんだよお前に。これくらいのは仕返しはさせろ」

――「……兄ちゃん」

――「哀れみなんざ百年はええ！　お前は失敗作で十分だ！」

――「……くっそ」

――「はっはっは」

結局そうやって笑ってたっけ。底抜けに馬鹿な兄貴だった。

鏡の製作者、永坂宗一。俺の実兄にして旧光ヶ丘生物工学研究所・生体兵器研究室室長――享年二十六。天才だった。

「……お前、そんな」

秘密にした覚えもないんだよ、本当に。誰にも聞かれなかったから誰にも言わなかった、それだけのことで――それだけのことで、

俺はこの戸惑うべきほどの変化を見逃していた。惜しいと思う。

「兄は死ぬ間際に研究成果である基礎理論とその応用、実サンプルをすべて焼却処分しています」

「もう、鏡は現存するものがすべて、ということか」

「はい。だから俺の持つてる失敗作と、楓の持っていた水鏡、そして桔梗の持つてる陽炎断が最後の作品になりました」

この事實は恐らく急速に、波及的にこの街を席卷するはずだ。誰もその事実には驚かないはずがない、そして失望しないはずがない。

そうさ、俺は変化を望んでいた。この街に住む人間のすべてを一度に巻き込んだの意識の変革——それも聖女の死を伴わない形でだ。まさかこんな簡単なことだったなんてなあと苦笑するが、訓練場は既に重苦しい沈黙と空気で充満していて、そんな苦笑いもすぐに押し潰されてしまった。

笑えてくるだろう？ 桔梗、そして楓。

お前らが守りたがったものってのはさ、こんなにも脆いんだぞ？
ほんの一つの息吹で容易く掻き消えそうになるろうそく——

——兄ちゃん、あんたはやっぱり正しかった。

——陽炎だよ、こいつらは。

つづきますう

3. 物見やぐらの中

学校制服であれば狙われない理由は簡単だ。つまり学校こそがこの街で最も強大な権力であるから。抱える戦力は街のほとんどの陽炎と各戦闘技術を学んだ生徒、そしてそれを授けるに足る教員の数々——まずこの権威に刃向かうなどという選択肢はありえない。個人行動時もそれは変わらず、「制服を着ている人間」が襲われ、万一にも負ければそれは学校権力の失墜に繋がるとされ、直ちに犯人への粛清が行われることになっているからだ。

特に見せしめということもしていないが、その粛清の徹底ぶりから、いつしかそういう風潮が街に蔓延していった——といういきさつだったからこそ、一度に法などでもって拘束するよりはずっと効果があったのが事実だ。

学生へ手を出すのは絶対に許されない。それは街の均衡を崩し、自らには身の破滅をもたらすのみだ。

——それが覆された夜だった。

——聖女の丘 3. 物見やぐらの中

その日はやけに学校が騒がしいと思っていた。物騒が日常的なこの街にあって、唯一その平和な喧騒に身を任せられる場所だったはずなのに、まったく朝から嫌な気分になる。なんてことを、隣を歩く桔梗に同意を求めてみる。

「この一年生が死んだみたいですよ。まだ肅清が終わってないみたいで」

「っはー……無茶するやつもいるもんだなあ」

まあ時間の問題だろうと、俺と桔梗の結論はすぐにそれに落ち着く。何しろ精鋭揃いで、たとえ桔梗であろうともうかつには動けないくらいの権力だからこそ、こうして欠けない岩としてきれいな校舎が保たれていたわけだ。

そこに手を出したとなれば——明日には死体がいくつか街に転がってるかなあ。

「職員の皆さんご苦労様ですだな」

「まったくです。掃除も大変でしょうに」

「血って落ちにくいらしいなあ」

「掃除ばかりやってる陽炎がいるみたいですよ?」

また変わったことをと思い苦笑がこぼれると、桔梗もまた同じように笑っていた。

事実として清掃活動に向いている鏡がないわけじゃない。武器として作られた物であるとはいえ、例えば潰すとか燃やすとか、そういったものは常に掃除に必要なものと決まっている。あえて戦闘をせずそういった道でこの街に残る、という手段もある意味では賢いと言えるだろう。

戦うことでしか道を示せない者がいれば、戦い以外で道を示す者もいる。当たり前のことだ。

特別カリキュラムは全学年正門から噴水を隔ててすぐの第一棟に教室が集中する。一緒に街を歩いてきた桔梗と一緒に玄関に入り、

靴のままで廊下を歩いていく。学校指定の革靴がリノリウムの床を叩いてこつこつと鳴る。

「最近真面目に訓練受けてるみたいですね」

「あー……ああ、まあ茜と約束した手前、堂々とサボるわけにもいなくなってるな」

「お兄さまに訓練なんて必要ないって、錫さんもわかってるでしょうに」

「……そういうもんだよ、教員ってのはさ。生徒の規範であると同時に、生徒を規範としなきゃいけない」

だからこそサボる生徒がいれば正す。そうでなければ水に墨を垂らすようにしてずっと滑らかに、そして確実に全体が冒されていくんだ。

「不良生徒がかわいってのはさ、全体として優秀な生徒を育てるよりずっと効率がいいんだよ。マイナス五をゼロにするほうが、プラス五をプラス十にするほうが簡単だ」

「でもお兄さまはマイナスじゃありませんよね？ 成績ならむしろプラス十のほうがと」

「……そういうのは揚げ足取りといいます、覚えておきましょう」

「はあい」

と楽しそうに笑って、桔梗は殴ろうともしていない俺の手から逃れるように一歩前に躍り出た。何が楽しいのか、今朝から随分機嫌がよかった。

「殺された一年生は特別カリキュラム内学年十二位……それを殺し、その肅清から一晩逃げられる人間なんて——どれくらいいるでしょうね？」

本当に楽しそうに、満面の笑顔でそんなことを言うのだ。

「……準備が整ったか？」

「いいえ、まだです。けれど……我慢ならなくなったというのが正解でしょう」

「まったく……程ほどにしとけよ？」

「はい」

と、彼女はもう一步前に跳ねて笑う。

そうして何度も手を振ってから近くの教室——一のCへ入っていた。

ため息一つ、一つ上の階を目指して、一段だけ飛ぶように登ってみた。桔梗のように軽やかにはいかないもので、登校の喧騒の静まらない廊下に、その音はやけに高く響き渡るのだった。

「……始まるか」

前兆を見逃すな。これからの桔梗の動きは、他者の一切の介入を許さない。……俺だけ。俺だけが彼女を止められるんだ。

——見逃すな。

訓練を真面目に受ける、ということが常に汗水垂らして身体を動かすとは限らない。特に鏡の特性がそれである以上、身体を動かすにしても精神修養という色合いがどうしても強くなってしまふのだ。いかに身体を動かし、いかに敵の動きを見、そして何より重要なのがそれらの情報をいかにして処理するかだ。

情報の整理、という能力が常に求められる。それも戦闘の際には瞬時での判断が命に関わる。つまり訓練の中においても、命を危ぶまれる状況に追い込まれなければまったくもって意味がない——

俺の場合は訓練で鏡を使うわけにはいかず、故に学校には持ってきていなかったんだ。訓練以前にそれ自体「一撃必殺」だから、いくら危険に追い込むとはいってもただの人減らしにしかない。まったくもって不便なものだと思うが、形が刀であるというのは幸いだったろうか、代替には事欠かない。

鏡同士の戦闘に「牽制」などはない。牽制の所作の間に相手の鏡は喉に刺さっている。一撃一撃が相手を行動不能に追い込むものであり、その一撃は相手のそれを防ぐものでなくてはならない。

一刀目は肩と心臓部を結ぶ線上——攻撃面積の少ない突き。

ガキン、と重い金属音が訓練場に響く。敵のナイフがそれを自らの左に薙いでいなした、

「左に薙いだら、左胸はがら空きだぞ」

そこに迫る俺の、「刀」。

「——！」

しかし意外といえば意外だった。

いくら快活とはいえ「葉」なんて鏡を持つ陽炎が、ここまで動けるとは思っていなかったのが本音だ。俺の二刀目を、薙いだ勢いを敢えて殺さず右肘で弾くと、ナイフを俺の心臓へ向けて突き出してくる。

熱くならないこと。常に状況を心の中で言葉として表せる程度の余裕は欲しいところだ。この訓練の肝は速さでなく、そうして状況を把握し続けることにある。そうでなければ実戦訓練なんてものは、ただの野蛮な殺し合いにしかならない。

刃物の応酬は好きだ。その高く澄んだ音は心を落ち着かせる。だからだろうか、兄ちゃんからそれを受け取ったときにも、たとえ「失敗作」だろうと素直に受け取る気になったのは。まったく度し難い変態もいたもんだと苦笑すると、それを余裕と取ったのか、敵は胸と腹を分けるようにして裂いてくる——俺の刀は先程弾かれて頭上にある。

獲った、と思っただろう。それを「刀で」弾くと、今度こそ息を飲む声が聞こえてきた。

「ちょっと、待って」

荒れた息を隠そうともせず訓練を止める「茜」。訓練だからうん、ちょっと待った機能くらいは備えないとね。待てを言った瞬間一切の攻撃は禁止され、いかな行動をもつても「違反者」として処分される決まりだ。おとなしく刀を地面に刺すと、茜は膝に手をつけて息を整え、上目遣いににらんできた。

「おかしいって、それ鏡じゃないんでしょ」

「んあ、ああ、鏡じゃないな」

「何で戻ってくるのよ……ちゃんと弾いたのに」

「驚いたぞ。うん、まさか茜がこんな動けるとは思ってた」
馬鹿にしたつもりもないのに、茜ときたらぞくぞくするほどの冷たい視線を向けてくれる。これまた意外なほど好戦的だった。

「いや、本当に見直したぞ黒沢」

「……錫ちゃん」

「これが、永坂の戦闘実技における好成績の秘密だ。誰にも防げない攻撃と、誰にも崩せない防御。勝てるはずがない」

「いやいやいや、ないない」

その表情をすぐにコケティッシュなものに変えて、茜は錫ちゃんに視線を移す。

俺の「これ」についてあれやこれやと論戦を交わしてるようだけど、まあたぶんすぐに答えにたどり着くことはないだろうと思ってる。事実としてこの一年間で誰も俺のこれに気づいた者はないし、今だってクラスメイト全員の視線が俺を刺していたのに誰も答えを言おうとしない。第三者の目線から見ても、実際にそれを体感してもわからない——お手上げだろう、俺だって「俺」が相手ならこう上手くはいかないだろうと思う。

でも本当に恐ろしいのはこんなもんじゃないんだ。楓の、そして桔梗の鏡に比べて、それは所詮ただの失敗作だ。現存する桔梗の鏡を実際に体感するとわかる……絶対などありえない、なんて絶対を覆されたのだと思うほどの格差だ。

まだまだ甘いな、と笑って刀を地面から抜くと、土を滑るようにクラスメイトの列に戻った。

「相変わらずすげえなあ。わけわかんねえけど」

座ったところで話しかけてきたのはクラスメイトの男。短髪を無造作に散らしただけの、失礼だが少し単純そうな、人懐っこい笑顔の——男だった。

「……誰だっけ」

もちろん名前は知らない。

「……そこんところも相変わらずだなあ。藍原康平だよ、ほれ」

名前と共に鏡の紹介、か。面倒な習慣だなあ、これ。

彼が地面から取った、傍らに置いてあったそれは有体に言えば釣竿だった。一応訓練に出てるわけだから見覚えはあるし、それがどんな鏡かも少しばかり把握している。ふーんと呟いて、地面に刺した刀を指して紹介してやった。

「これ、精神感応アセンブリユニット、月鏡」

「――は？」

「兄ちゃんの研究成果だよ。というか鏡の研究の過程で生まれた、これもまあ失敗作だ」

「……反則じゃねえか」

「嘘は言ってない」

完成品という形を取る鏡に対し、この月鏡はあくまでその部品となりうるものでしかない。確かに開発者を兄に持つという点じゃあ他の陽炎に対して申し訳ないほどの「反則」なのは認めるが――これを鏡で制することができないようじゃあ、正直なところこの街で真相にたどり着くのは難しいはずだ。

「これ以外にも色々もらってるぞ。桔梗もだ」

「あー、妹さんか。ったく、対抗するのが馬鹿らしくなるな」

「まあ対抗する必要なんかないしなあ」

「そりゃあそうだが、とは言ってもなあ」

そりゃあ各々目的があるからこそここにいて、その手段として戦闘はこの上ないもののはずだ。そうでなければ学校に来る理由も半分以上なくなるし、それとなれば誰より上に立ちたいというのは当然の欲求だ。それを承知で言わせてもらえば、欲を出せば死ぬ――長いものには巻かれていろ、ということだ。

別に俺が長いものとは言わない。けれども俺のその先にあるものが何よりも長物だということは、いくら一介の学生といえどわかってはいるはずだ。

憎めない笑顔をした人間が周りに集っていく。知的だとかいった、冷静な人間はまず俺には寄ってこない。野心を持つ人間がどんなものであるかは知らないが、まったくもって都合のいいことだった。いやまあ、静かな人間が苦手ってだけの理由なんだけども。

「まあ、少なくともガチで敵対しようとは思わないわな。意味なし」

「もっと熱いのかと思った。第一印象」

「第一って……まったく、熱いだなんだと言ったところでなあ、この街にいる以上目的が達せられなきゃあただの負け犬だろうが。熱い人間が負け犬になりたがる道理はないぞ」

「……ううむ。あっちを立てればこっちが立たず。難しいもんだな」「嫌味にもなんねえ辺りが余計腹立つわあ……」

気づけば目の前で次の組の訓練が始まっている。

興味はないがなんとなーく目で追ってみれば、銃と銃、リボルバーとアサルトライフルというなんとも物騒な鏡を使った対戦となっていた。

弾は空気かなんかかな……なんて思いながらぼうっとしていると、ざすつと少しばかりの土が舞い、右隣に來た気配に目を向ければ、無然とした顔の茜が膝を抱えて座っていた。

「わっかんなかったー」

「ん。答えとは言わんが、ヒントならこいつに教えたぞ」
指差す左側には人懐っこい笑顔の康平ちゃん。

「……どんなん？」

「タネも仕掛けもあったよ。ずるいよなあこいつ」
無然とした表情に若干の呆れがプラス。表情豊かでかわいらしいことだ。

「この刀がさ、兄貴とやらの失敗作なんだってさ。要するに鏡の劣化版みたいなもんだろ」

「ひっどいなあ、訓練でそこまでのるか」

「……いやあ、まあ他に使うもんじゃないさ」

普通科にいた頃は、したり顔で「実戦でそんなことを教えてはくれないぞ」と言うやつもいたが、ここへ来てそういった人間はまったくいなくなった。そんな忠告はされずともわかっているし、戦闘中いかなる事態にも対応できるよう目を凝らし、その上でわからないから聞いただけの話なのだ。そのための訓練だというのに、敢えて無知のままでいる方がよっぽど無能だ。まだまだ時間はあるから自分の力で見ろだとか、ただ忠告だけという人間の浅慮を見ずに済むという意味では、特別カリキュラムに進学したのはまったくもって正解だったとしか言いようがない。

理想を説いたところで意味はない。目を凝らしていたってわからんもんはわからんし、口に出して聞いてみれば、ひょっとしたら調子者の敵が何かしらヒントを与えてくれるかもしれない。無駄を語る人間は、その時間を無駄とは考えないものだ。

「それで、その月鏡？　ってどんななの？」

「思考に対して無理矢理身体を追いつけるんだよ。少し筋肉痛が残るけども」

「単純だなあ……けどすごい欲しい」

「まあ効果的だよな。あくまで刀を持った腕のみにて制約はあるんだけどな」

思考から駆動までのラグを限りなくゼロに近づける。あるいは思考をもって駆動と成す。肉体的な強化をその上で直接行い、ほんのコンマ数秒ではあるが敵の視界を欺く程度には速く動かせる。

そもそも陽炎でない普通の人間であれば、反応速度はおよそコンマ三秒程度が平均だ。それをコンマ数秒縮めるのであれば、もはや全反応を反射に変えるといっても過言ではない——そこに思考の余地があるのならそれほど防御に適したものもないだろう。近接戦用武器ながら銃弾を弾くにも事欠かず、実のところ俺の場合鏡よりもよっぽど使い勝手はいい。事実として訓練、実戦共にこれを使うほうがほとんど多いわけで、鏡はいまだ家のどこかで埃を被ってる気がする。

「……呆れた」

「いやいやマジで危ないんだって。俺以外が持てば暴走するような代物だぞ？」

「暴……走……?」

「泥棒が間違っって握ってみろ、家が消し飛んじまう」

「こっわ」

持っていないんだからそんなに後ずさりしなくてもいいだろうと睨む。茜は乾いた愛想笑いで応えて、すぐ隣へ戻ってきた。とはいえ、

「随分近いな」

「温かいもん、けーちゃん」

「――」

思わず言葉を失った。

なぜ、その呼び名を。今更になって。

「あれ、ダメだった？」

不思議そうに小首を傾げる茜のその表情――ぽかんと抜けてて、愛らしくて、どこまでも優しくなそれが……

「あー、黒沢、それな、楓さんが永坂のこと呼ぶときのな」

「あ、あーあー……悪いことしたね。ごめん、からかつちゃおうとね、弾みでさ」

いや――、いい、気にしてない。

その言葉が出てこない。脂染みた冷や汗が止まらない。どうして、楓の死はもう割り切ったはずだったのに。墓へ行っても涙は出るが後悔は浮かんでこない。桔梗を見ても「楓」と呼ぶことはなくなっ

た。
なのこの面影はどういうことだ。俺の前に現れるなよ、もう……
「やばい？」

「どうだろうな。こんなふうになるってことは……お前が似てたんだろうなあ、楓さんに」

「あたしが？ んー、見たことないからなんとも言えないけど」
大丈夫だ。

大丈夫だ、大丈夫。何も悪いところはない。汗はもう引いたし、思考も冷静。視界良好、訓練で流れてくる土埃を一粒ごとに感じられる。俺は、大丈夫だ。

言い聞かせれば立ち直りは早い。

「大丈夫、悪い。いや実際、茜は時々楓に似るよ」

「んー？ 写真とかないの？」

「――」

ここまで突っ込んでくる人間が今までいただろうか。楓の名前を出すだけで遠慮するような人間がほとんどで、その姿を見れば涙をこぼす者までいるくらいだ。事実その言葉に康平は顔をしかめているし、周りのクラスメイトも少しばかり肩を震わせた。

けれど俺の底からこみ上げてきたのは笑いだった。おかしくて仕方ない。

「ははは、いや、」

「なによ。見てみたいじゃん、そんな素敵なお人なら」

「いや、はははは……そうだな、写真はなくてもいいけど、もっと生身っぽいのがいるぞ」

「生身？」

「生き写しだなあ、あれは」

今年一年は何をしているだろうと思うが、そういえば実戦訓練のうち週二時間くらいは全学年合同だったような記憶がある。五百メートル四方はあろうかという土の訓練場をぐるりと見渡すと、案の定と言うべきか、目当てのクラスが目についた。わかりやすいんだ、あいつのクラスの訓練はド派手だからな。

「じゃあちよっと呼んでくるわ」

「あいよ。先生に怒られんようになー」

「……んん？」

また不思議そうに小首を傾げる茜に、早く会わせてやろうと全力で駆け出す。

いやはや不思議な心地だった。積極的に桔梗を誰かに会わせよう

だなんて、今までに一度も思ったことがない。もちろん桔梗も人見知りの嫌いがあるからそれで満足していただろうし、万が一桔梗に俺より夢中になれる人間ができたのなら嫉妬の一つもするだろう。

まったく不思議な心地だと笑ったところで一のCの訓練スペースにたどり着いた。駆けてきた上級生に怪訝な表情を向ける者が多数の中、すぐに気がついて寄ってくる一人。

「お兄さま、どうされました？」

となればクラスメイトも事情がわかったろう、……と思ったら、随分とざわついてしまっていた。

「何だこの騒ぎ」

「さあ……いつもはおとなしい方たちなんですけど」

視線を泳がせてみれば、好奇に満ちた視線が三十対。それから「またか」といわんばかりの呆れた視線が一对。

そのうちの一人がおずおずといった具合に声を上げた。女の子だ。

「御神楽さん、その人は？」

「わたしのお兄さまです。実の兄ではありませんが、姉さんの恋人だったもので」

「……って、いうことは」

そういうことだ。

ざわめきが増して、質問がいくつも飛んでくる。まったくもって答える気もない俺はどこ吹く風と聞き流していたが、桔梗はしっかりとそれらを耳に入れ、

「黙りなさい」

その一言。それだけで訓練場の一角が凍りついた。

「下世話。不愉快。お兄さまを貶めることは、わたしを貶めるものと思いなさい」

怖い怖い。俺は後ろから桔梗の後頭部を引っつかむと、ギリギリと締め上げるのだった。

「痛い痛い痛い痛いですお兄さま。ご乱心ですか」

「クラスメイトを脅すな。お前はいつもこんな調子か」

「いつも……いつもは普通に喋ってますけど、あんまり失礼なこと聞くんですもの」

と、いつの間にか俺の手から抜け出した桔梗が上目遣いにぶーたれる。

桔梗のクラスでの立ち位置は、ごく普通の優等生だったのだ。トップに立てる実力は十分にあるが、だからこそその危うさに気づき、それを隠す才にこそ秀でた桔梗はすぐにその立場に落ち着いた。

なればこそ桔梗が見せたその一面に驚きが隠せないのだろう、クラスメイトの啞然とした視線がかなり滑稽だった。

笑いを堪えて用事を思い出し、

「で、用事なんだがな」

「はい？」

「会わせたいやつがいるんだよ。茜」

「ああ、はい。すぐ行きます」

教員にそれを告げようともせず、桔梗は俺たちのクラスへ歩き出してしまった。なんとなく漏れた苦笑は悟られなかったろうか、代わりに教員へそれを告げてそのあとに続いた。

茜の感想は一言だった。

「き……れー……」

ものすごく単純であり、万感の思いを込めたと言わんばかりに起伏に富んだ調子の言葉だった。

事実桔梗は女としてほとんど完成された魅力を持っていると思う。それは若さであり、様々な経験から勝ち得た理知であり、何かを悟った力強さと歳相応の可憐、そして何よりもその存在の危うさを思わせる色の希薄さ——まさしく完成品だった。

白と藍の制服に、その銀灰色はよく映えた。土色の訓練場にあっでは尚更だ。その美貌を自慢するように肩を抱き、わざわざ立ち上がってくれた茜に紹介をしてやった。

「俺の妹の桔梗さんだ」

「……妹兼家政婦の桔梗です。兄がそれとなくお世話になってるかもしれません」

「……あははー……ああ、クラスメイトの黒沢茜です。お兄さん……？ にはいつもお世話になってー……ま、す……？」

顔が引きつってるぞ茜、とは言えなかった。こういうのを慇懃無礼って言うんだろうなあと思ひなく思えるほどの棒読みに、お兄さまは感涙を止められない勢いだ。

「誤解なきよう言っておきますが、別に嫌いというわけではありません。牽制ですお兄さまを取られないように」

「取る……って、別に永坂君をどうしようとはこれっぽっちも思っていないけど」

そりゃあそうだ、俺たちは秘密を共有する仲間であって、恋仲にだなんて考えたこともない。だからこそアパートに上げることにためらいなんてものなかっただろう。

その辺りは桔梗も納得済みらしく、すぐに笑顔を作った。いつも通りの優しいやつだ。

「ええ、ですから一言言っておきたかったです。わたし、お兄さまのこととなると自制がきかなくて」

「マジだぞ茜、絶対俺に手を出すなよ」

「頼まれたって嫌だよ。そういう関係になっちゃったら、やりづらいもの」

恋愛は大義の前に邪魔なものでしかない——ある意味じゃ当たりだ。

「それを聞いて安心しました。では、これからお兄さまをよろしく願います」

と、茜の前に恭しく手を差し伸べると、桔梗のその手には既に「茜の手が握られている」。誰にも知覚されず、その結果を疑問にも思わせず、そこにあるものを現状として固着させている——何度見ても鳥肌が立ちそうなほど鮮やかな手際だった。

これを戦いに活かせばどうなるか、もはや想像することさえため

られる。

桔梗の笑顔が、茜から俺へと移される。楓のそれを思わせる優しい微笑みは、去年から今まで、絶えることなく続いている――

その夜の食事は俺の好物、楓も得意料理にしていたエビチリだった。甘辛いソースがプリプリのえびに程よく絡んで、本当に絶妙な味だった。

「喜んでくれてうれしいです」と笑う桔梗も、楓の作るそれが好きだった覚えがある。

いつだったか楓が桔梗に料理を教えたことがある。この家の、このリビングから見えるキッチンで、姉妹仲良く笑いながら料理を進めていた。桔梗は物覚えがいいから何事もすぐに吸収していったけど、料理だけは「何度やっても姉さんには勝てないなあ」って苦笑いしてたっけ。まったく悔しそうなじゃなくて、そこにはただ出来のいい姉を誇る妹の姿があって、俺はその後姿にニヤニヤと頬を緩めていただけだった。

そんな桔梗も今はこうして楓に負けなくらいのエビチリを作るようになった。兄として感慨深いものがあるなあとしみじみ言ってみると、目の前に座る彼女は「幸せですね」と笑うのだった。

幸せ――ああ、まさしくだった。楓がいなくなつて、その代わりに桔梗がこの家にいてくれて、そして「幸せだ」と笑ってくれている。これが幸せでなくて何と言うのだろうか。

妹という形。家政婦という形。あるいは後輩という形もある。桔梗の持つ顔は本当に色々で、たまに俺も知らないような貌をすることもあった。彼女の知らない俺の貌もあるだろうか、あるいは彼女は何を求めているのだろうか――ありとあらゆる疑問に対する答えを、俺は胸のうちに用意することができる。

「幸せですね」と桔梗が笑う。

「――ほんと、いつまでもこうだといいいけどな」

「はい。いつまでもこうしていきましょう」

その夜、市立光ヶ丘高校特別カリキュラム第二学年Aクラス――格闘戦実技成績・学年十八位の上位学生が殺害されたと報じられた。前代未聞、肅清が行われないうちの二人目の被害者。

――「犯人はいまだ光ヶ丘のどこかに潜伏中と見られ、市民への警戒が呼びかけられています」

つづくんです

4. 最高傑作

学校、いや街全体がピリピリと緊張しているのを感じる。陽炎の数が多いのとその一因だろう、彼らの強い感情は時折体外に漏れ出て他人に影響を及ぼす。だからこそ鏡はこの街に集い、自分の本質というものを知ろうと足掻くのだ。

いまだ真相にたどり着いた人間はいない。それは即ち死を意味するからだ。

——聖女の丘 4. 最高傑作

桔梗の強さの秘密はまさしく鏡への適性が異常に高いことだ。思い込みが激しいということは、つまり一つ頭に思い浮かべた事柄について一切の疑問を抱かないこと。それこそが鏡への適性であり、陽炎以外の人間には誤解があるようだが、それは決して訓練で得られるようなものではない。

訓練によって例えば「上官の命令は絶対」と思い込むとする。だがそれは「上官の命令に従う」という後付の命令でしかなく、確実

にどこかで効率や成功率なんかを打算しているものだ。そういったものでなく、陽炎は「右足を前に出す」といった思考の必要すらないレベルの行動単位で、ほとんどの思考を成立させてしまう人間を言う。

思考をしないわけじゃない。もちろん何かに迷い、悩み、時には立ち止まりもするはずだ。ただ一点、その成立や成功において一切の疑問、妥協、迷い、苦悩、悲哀、あるいは歓喜ですらも封殺し、行動する。誰が迷惑を被る、誰が悲しむ、たとえそれが自らにとつて最も大切な人間であつても関係ない、一切を踏みにじって走り続ける。

だからこそ桔梗は陽炎として誰よりも強いのだと断言できる。彼女が何を成そうとしているか、彼女の「捌り所」――陽炎足りうる由縁となるその一念が何であるのかは、実際のところ理解し切つてはいない。ある程度のところ、それ以上踏み込めば命が危ういとかつていいるからだ。

茜とてまた然り、俺も康平もそうだ。陽炎すべて、その一念に踏み込まれると普段とは明らかに格の違う力を発揮する。踏み込まれることをその阻害因子とほとんど自動的に認識してしまうからだ。

暴走――つまりそういったものを指す。

そもそも陽炎という存在自体が「人間の暴走」だ。種の存続すら省みない、生物としての失敗作だ。

作り物では決してない。神という概念を抜きにしていえば、確実に陽炎も他の人間と同じ生物ではあるはずなのだ。

それでも陽炎は光ヶ丘に集う。誰も外では生きられないのだといつかは悟る。

「というわけであたしはここにいるわけですが」

「……誰に言つてんだ」

「何で光ヶ丘に来たんだつて言うから答えてたじゃん」

長い説明だったから途中から考え事をしていた、とはいえない雰囲気だ。

「あたしも外で暴走しちゃった口だよ。他にもいるでしょ、そういう子」

「あー……いるようないないような」

「あんたに聞いただけ無駄、ってことね」

失礼な。ちよつと他人の名前と顔とその他個人情報覚えるのが苦手なだけだ。覚える気がないと言い換えてもいいが。

「でもここはいいねー。陽炎の楽園だよ」

「まったくだな」

「生きてちゃいけない人間だなんだと言われてさ、ここに来て啞然としたよ。誰も彼も殺しを知ってて、そこに疑問も抱かない。あたしの悩みなんて、所詮温室で育てられたかわいいお花の、あたしが他よりかわいくないのはなんで？　みたいなもんだってね」

「気持ち悪いな」

「……忌憚ない意見に濡れそうだよ」

いやいや、謙遜することないぞ。裏声で「かわいくないのはなんで？」なんて、俺も女だったらしばき倒してるところだ。

だが事実としてその認識に間違いはない。温室なのだ、外は。誰も自分がいつ死んでもおかしいものとは思っていない。誰も周囲に争いが絶えないことを認めていない。そこにあるのは経済活動とか文化とか、そういったものの対立でしかないと思っ込んでいる。

殺意——それを否定する。憎らしいから殺したい、その単純な論理を認めない。それは人間が社会的文化的に組織単位で生きる生物だから、繁栄のためにはまったくもって正しいのだろうと思う。けれど外の連中は茜のような人間を罵り、「逃げた」と揶揄するのだ。

逃げたのはどっちだ。生きたい生きたいと生に縋って、いつもいつも死から逃げ回ってる外の連中が、それを求める茜に「逃げた」などと言えるわけがない。

「わかってるんだけどね……どっちが人間として正しいか、なんて」「そんなもん知るか。正しかりうがなかりうが、俺はやりたいこと

やるだけだ」

「……生き物として正しいね」

「やっぱり人間としちゃ間違ってるけどな」

総体として、種として繁栄から退くような真似、どんな生物もやりたがらない。

「でも、死にたくはないんだ」

「……死にたい生物がいりゃ、そりゃ欠陥品どころか生物ですらないだろう」

ため息でその言葉に応えた茜は、やれやれといった調子で立ち上がった。

ほんの六畳ほどの畳の部屋に、ベッドとクローゼットとテーブルが一つずつ。カーペットは白で、二つのクッションがピンク色。それが茜の部屋だった。いっそ清々しいほどに何もない部屋だった。あとはその一間と玄関の間に小さなキッチンとバスルームがある程度。

「……趣味とかないのか、お前は」

呟いたような小さな声だったけど、キッチンへ向かった茜にはしっかりと届いたようだ。

「んあー、寝るのが趣味？」

「しっかりしなさい女の子」

「女の子っていいってもなあ、……あ、ほら、クッションとか女の子っぽいでしょ」

俺が今胸に抱いてるこれは、うん確かにピンク色でところどころに白いハートが散りばめてあって、確かに女の子らしい一品だ。

桔梗ですらぬいぐるみとか持ってるし、趣味らしい読書なるものもたしなんでるんだ。浮世離れの代名詞、彼女と比べると茜はずっと俗っぽいとは思ってたんだが、どうやら認識を改める必要がありそうだ。

「あのふすまの奥には何があるんだね」

「そこは布団入れだよ」

「……ベッドなのにか」

「うふふ、ミステリアスなところ、見つけちゃったね」

布団入れのどかがミステリアスなのかさっぱりわからんけど、と
りあえずこれ以上の追求は止めておいた。

戻ってきた茜は小さな丸テーブルにかわいらしい水色のティーカップを二つ、ことりと置いた。まだ寒いとも暑いともいえない時期ではあるが、黒い湯面からは少しだけ湯気が立ち上っている。

「インスタント万歳」

「……こだわりの欠片もないな、茜の部屋」

「ベッドはヒノキ製のちょーいいやつよ？」

あくまで寝ることにこだわるつもりらしい。

茜お手製コーヒーを一口すすって、その安っぽい香りに少し酔ってみる。無茶なもんだと思ったけれど意外といいもので、まあ気分次第なんだろうなあと妙に悟った気持ちになる。

そもそも茜の部屋に來たのは、楓の墓からの帰りに先日と同じよう誘われて、それに乗ったというだけの話だった。桔梗が茜への警戒心を緩め、「誘われたのならどうぞ」と言ってくれたからだ。

桔梗を積極的に会わせたのが初めてなら、桔梗の信頼をこれだけ早くに勝ち得たのも茜が初めてだ。転入生というこの街では異色の存在が、まさかこうまで早く溶け込んでくるとは思ってもなかった。何事にも躊躇なく踏み込んでくるその気安さが、逆にいい方に働いた――くらいのものだろうか。

女の子らしくない部屋、とはいったものの、香りばかりは不思議と甘い。

「永坂君さ、門限とかなりそうだけど、どう？」

「んー？ ああ、そういうんはないな」

「へー意外。桔梗って、結構束縛しそうなイメージあったけど」
楽しそうな言葉に少し首をひねってみる。

束縛、ねえ。

「家政婦が主人の生活を縛る、なんての聞いたことないけども」

「……あれ、本気だったんだ」

「そりゃあ本気だよ。むしろ妹よりそっちのほうが強いって本人は言ってるぞ」

「つまり永坂君は違うと？」

揚げ足取りっていうんだ、そういうのは。内心の反論をそのままなかったことにして、代わりに苦笑でやり過ごす。そういえばそんな感じの応酬を桔梗ともしたっけ。

そんな俺をからかうように笑う茜は、胡坐をかいてまったく色気もクソもあつたもんじゃない。セーラー服のスカートを短くはいるから、ハイソックスとその間の露出は桔梗のそれよりもずっと広い。桔梗は俺に対しては特に恥らうでもないが、こいつには羞恥心してもんがないだろうか。

コーヒーを飲むのにすすめるようなこともしない。静かに口をつけて、カップから離れたその口でゆっくりと息を吐く様子は、まるで一枚の絵のように様になっている。のに、ちっとも感心する気にならないのは、その体勢のおかげなんだろうと思う。

「はー……平和だわー……」

「今そのセリフを言えるのは茜くらいだろうと思う」

「どんな人だろうねえ、肅清から逃げられる人って」

物騒な話題を選んだつもりなのに、茜のバカ面はちっとも変わらない。

「桔梗なら逃げられるかもなあ」

「……それはあれ？ 探れっていうあれ？」

「探ってもいいが、もし本当に桔梗が犯人なら、恐ろしい目にあうぞ」

「……やめとく」

そりゃああそうだ、死にたいなんて生き物がいたら、それは既に生き物ですらない。

何事も知りたがりの人間は多いが、突っ込まなくてもいい地雷原に突っ込みたがる人間の心理というのはどういったものだろうと時

折疑問に思う。探究心だとか好奇心だとか、なぜ陽炎でもないというのにそういったものを自制できないのかと思う。人間が仮にそうして進化してきた生き物だというのなら――例えば同等の知性を持った生物が同じ惑星内にいたとしたらどうだろうか。人間を自らの種の存続を危ぶむ敵性体だと認めていたらどうだろうか。その探究心の強さを知り罍を張っていたらどうだろうか。罍の存在を他の人間に知らせるため――だというのなら、まったく種存続の合理性ときたらない。それを「犠牲」だのと美談にしたてあげる人間にも拍手を送りたいくらいだ。

陽炎は人間だ。だから人間の種の存続を願う。

「あ、粛清って、バイト料とか出るのかな」

「さあ。まったく興味ないから知らないけど、推薦状とか必要みたいだぞ」

「……なーんだ、つまんないの」

バイト感覚で粛清に参加しようという茜の言葉に苦笑が漏れる。なにしろ粛清は絶対必要悪と考えられているから、聞いたところによると至極厳かな雰囲気で行われるらしいのだ。それをこんな、

「マヌケ面で参加したら怒られるぞ」

「それはあれ？ 普通に悪口？ モノローグを口に出しちゃっただけ？ どっちにしても失礼だけど」

「もちろん前者だ」

「かわいくないね、最初はちょっと不器用でふてくされてる男の子かと思ってたのに」

仲良くしたいけど俺上手く話せないし……それに笑うのも上手くないから、きつと皆に嫌われちゃう……ってやかましいわっ

「そんな感じ」

「鳥肌立ちそう」

「あたしはもう立ったよ」

それはそれは結構なことだのため息で応える。

茜のこういう気安さは、確かにいい方向に働きそうなほどにはあ

りがたく思う。まさしく忌憚のない意見というやつで、それを隠されたり陰で言われたりするよりはずっといい。なにしろ俺たちは陽炎で、そういった感情を受け取りやすい身体をしているのだ。悪意に対しては特に敏感で……茜が来るまでは、楓の名前を口にしただけでビリビリと強い風を感じたものだった。

何かが変わると信じさせてくれる女。黒沢茜には何かがある。

「晩御飯どうする？」

「いや、桔梗は俺がたとえ帰ってこなくても作るからな。帰るよ」

「それがいいね。愛されててうらやましいわあ」

「一緒にいると中てられるほどラブい空気を演出してるぞ」

「いいねえ、ラヴ」

そしてコーヒーマウ一口、数秒ばかり無言になった。

口が巧いというか、とにかくその言葉に何かしら答えてやりたくなる人だ。軽い調子で胸の隙間に入ってくるような、曲芸のような話術だった。

だから心地いい。騙されて「おー」と拍手をする人間の心地だ。

「あたしはね、聖女を探しに来たとか、そういうんじゃないんだ」

「……へえ？」

「目的、とか、そういうのもほんとはないのね。ただ……ただ、ほんとに自分を正当化したかっただけなんだと思う」

コーヒーマウをすすって話を続けるよう促す。相槌も挟む気はなかった。

「その手段として聖女を、うん、あんたには悪いけど、聖女を利用したがつてたんだと思う。すべてを許してくれる、って聞いてたからね」

その通り、聖女はすべてを許すよ。殺人も、盗みも、独善も嘲笑も、すべて生物のする行為を正当化してくれる。そこに矛盾があってもだ。だからこそ俺に対して何も罪悪感を覚える必要はない。

「でも、いないってわかってみると意外とあっさりしてるのも事実かな」

「……」

「結局、生きてみるしかないんだなとは思った。だから死なないことを目的にやってみるって、今の心の中」

「悪くないな」

「悪くないでしょ。あたしが消したいくつかの命は……きっと許しはしないだろうけど」

茜に殺された外の人間。その周囲はきっと今も茜を責め続けていることだろう。恐らくそれこそが茜の「抛り所」——なぜならそれほど茜を揺るがしながら、茜はまだ暴走に至っていない。つまりその事実のいずれも、茜の核心にまったく触れていないということだった。

自己正当化には他人が必要だ。他人が自分を否定することを止めると、そこで正当化の必要はなくなる。

「薬——どっちかっていうと、麻薬のほうか」

「……さすが。あたしの薬は夢を見せるんだ」

自己肯定と自己否定のほぼ無限なる循環——それが茜の見せる夢の正体だと言う。精神の混濁から肉体的破壊、最終的に死に至らしめる茜の鏡は、毒でもありうるが、そもそも毒というものの本質こそが薬だ。鏡は武器として作られたものだからして、「治す為の薬」なんてものがあるはずもない。あるいは兵士を常に健常のまま戦場へ送り出すため、というのならずっと納得はできるが、そんな手段を兄ちゃんが選ぶとは思えなかった。

鏡での攻撃は、陽炎でない人間からしてみれば理不尽に映るものが多い。錫ちゃんはほぼ完全な密室殺人が可能だし、茜に至ってはその死体は「自殺」にしか見えない凄惨極まるものになるはずだ。だからこそ茜が疎まれたその状況が手に取るようにわかった。

「……茜にも俺の秘密を一つ教えてやろうか」

「興味あるね」

「指、切ってみろ」

「——は？」

「俺の指、なんでもいいから切ってみろ」

茜は呆然と俺を見る。そして俺の目が冗談も何も言っていないとわかると、キッチンから包丁を持ち出してくる。――何かしら感じる場所があれば、友人の指を切り取ることに何の躊躇もない。それが陽炎だ。

そうしてテーブルの上に置かれた俺の左手小指を、その包丁でスドンと切った。驚くほど簡単に、軽く切れた。

その茜が、目を見開く。

血も流れていない。露出した肉から少しばかりの放電がある。それが人間のものでないことなど一目瞭然だった。

「……なに、これ」

「機械でも肉体でもない、その融合――生きた機械、それが」
「え、うそ」

完全に切れた指が復元を始める。そういう「システム」が組み込まれている。

「それが鏡っていう兵器の組成物質だ」

「――！」

永坂宗一の「最高傑作」、鏡という兵器の概念を覆すそのの、更なる異端。人型を取るにより更なる精神感応の強化を可能とした、人が扱う人という、心を持つ人間にとって最上の兵器の形。

弟として啓一と名づけられた。その被験体として優秀な陽炎が常に張り付いていた。使用者として、あるいは監視として、――そしていつしか人の情が芽生えて心を通わせ、理想通りの果てしない精神感応を記録した。俺たちは最高の恋人だった。

「俺の秘密だ」

「……ごめん、こ、言葉が、出てこない」

震えた声に思わず笑ってしまった。いつも飄々としている茜らしくない。

「これを知ってるのは今じゃあ桔梗だけだよ。茜、お前に話したのも気まぐれだよ」

「ひ、みつに、してもらったままのほうが、よかったかも」

「はは……怖いかな？」

「――」茜の目がもう一度開いた。

脚を伸ばしてテーブルに手をついて、――俺の手を取った。身を乗り出して、そうしたら茜の瞳に俺の顔が大きく映るほどの距離に、彼女はいた。

「怖くない」

「……震えてたぞ」

息がかかる。熱くて甘い、少しコーヒーの香りがする。

「あたし、あんたの傍にいる」

「……」

「ずっとだよ。もう離さない。誓った、今」

茜の目は冗談も何も言っていない。目は口ほどにものを言う、とかそういう話じゃなく、嘘を言うときにはどこかしらに不自然な動きが出てくるものなのだ。目はその不自然な動きに耐えるよう真摯でもあるが、だからこそ真実を言っているときの目は揺らぎやすい。少し濡れてる。それが揺れると、たまらないくらいきれいだ。

「……恋、じゃないから」

確認するようにして頬に口付けて、茜はすぐに離れて元の位置に戻った。ごまかすように胡坐をかいて、いつもの茜として振舞おうとしているのがわかる。

「やっぱいいなあ、今の永坂君、ときめきまくりだったよ」

「……まあ、モテる男の宿命というやつだな。陰を見せて同情誘う辺りがあざといだろう」

「はっは、あたしは趣味が奇特なのだよ」

今はそういう減らず口が心地よかった。

本当はここまで教えるつもりじゃなかった。楓の死、それを教えるれば十分揺さぶりになるものと思っていた。ただ、それ以上のところにまで土足で踏み込んでくる茜の態度がなぜか快くて、どれだけの事実を知れば揺らぐのだろうと興味が湧いてしまった。

——地雷原に突っ込みたがる人間の心理、というのはこういうものなんだろうか。至極突発的で、止めようと思ったときにはもう動いているような……そういうものなんだろうか。

「……誰にも言わないよ。あんたは人間だもの」

「わかってるさ。俺が兵器だなんて言ったら、それこそ桔梗に殺される」

「愛されてるんだね……ほんとに」

そう思う。そう願う。

そもそも桔梗は俺がまだ兵器らしい兵器だった頃からずっと、楓との仲を取り持ってくれていたのだ。兄ちゃんも楓を好きだったのは知っていたはずだけれど、「姉さんにはお兄さましかいない」と言って聞かなかった。理由はわからない。

ただ、もういない兄ちゃんと楓の代わりに俺を求めるようになった。他の何者も愛さないようお願い続けている。

「コーヒー冷めちゃった。いれ直そうか、それとも帰る？」

「ん、桔梗も待ってるだろうし、帰るよ」

「それがいいね。見送るよ」

好意は素直に受け取って、月鏡を持って立ち上がった。

劣化することのない生体機械だからこそ抜き身で持ち歩けるし、何度も刃物同士で応酬が可能だ。それは継続時間の短いパルスに対応できるような人体に限りなく近い組成でありながら機械でもある——個々のパルスの変量・変質、その対応にまだ限りがあったために「適性」という言葉が必要になった。

月鏡は誰にでも扱えるという水鏡の理想を踏襲した、失敗作というよりは試作品だ。茜は物欲しそうにそれを見て、苦笑いのような笑顔で手を振ったのだった。

「じゃあ、また明日ね」

「ああ、また明日」

別れて見上げる空——月はどこにいても同じなのだろうか。何を映しているのだろうか——なあ、月鏡。

茜の部屋から西へ百メートルほど——ぐっとその柄を握る。

下段の構え。攻撃には向かないが、相手の機先を制すそれは楓の得意とするところだった。切っ先をやや落とし、右足をやや前に出すのが剣道での下段の構えだと聞いたが、楓は陽炎がそれでは攻めあぐねるだけだと右足をやや後ろに下げるよう変化を加えた。下段でありながらどこへでも跳び、とにかくも相手を行動不能にする。跳ぶ、という行動の危うさは古来から指摘されるところではあるが、鏡を持った陽炎は敢えてそれを好むようになった。——即ち着地時に発生するエネルギーの効率変換が、その無茶な駆動から可能となったから——

跳んだそのあとに、元いた地面がえぐれる。それを視認する間もなく足元がえぐれ、次々と地面に穴が開けられていく。このままじやあジリ貧——に、なるとでも思ったか。下段のメリットはもう一つ、狙撃手を見つけやすいことだ。

着地と同時に月鏡を靴に腿に押し当て、その勢いを殺すことなく脚全体を使って反転、トルクアップ。

茜のアパートから西に五百メートル。そのビルの屋上へ二十歩でたどり着く。家の屋根がいくつか崩れたが許せ、俺のせいじゃない。

屋上にいた「クラスメイト」。名前は知らない——その顎に月鏡を差し出した。つぶれた腿に顔をしかめようもしないその精神力は、なるほど確かに光ヶ丘の住人だと言うに十分なものだ。

「何のつもりだ？」

「……容疑がかかってる。容疑者はすべて殺すのが粛清の在り方」

「粛清、ね。月並みだけど、証拠はあるのか？　少なくとも容疑がかかるほどの」

「ない。粛清を逃れられる実力者を当たった」

「それは……個人的調査結果でしかないな。粛清対象としては不十分だ」

クラスメイトの女子もそれは承知していただろう。つまり、覚悟は済んでいた、ということだ。

「抵抗もできない。それでよく推薦状がもらえたなあ」

「……あんたが異常なのよ。何よ、あの距離からあの速さ——」

言葉は続かなかった。続けさせない。

落ちた首を見てふと夜空を見上げてみる。

——こんな血に染まったもんでも欲しいもんかな、茜。お前のヒュギエイアの比じゃないぞ、これは——

ふと背後に足音を感じて振り返る。相手の目星は既についていたが、そこまで気づけなかった自分に少しばかり失望を覚えた。

「お疲れ様です、お兄さま」

「ああ、やっぱり気づいてたか」

「ええ、お兄さまが戦えばわたしが感じる。お兄さまも同じでしょう？」

「まあ……桔梗がどこで何をしているか、わからないでもない」

予想通りの微笑をたたえ、桔梗はすぐに隣に立ち、クラスメイト「だったもの」を踏み潰した。異臭が辺りに漂い、すぐに霧散する。

その後血溜りを片そうともせず、桔梗はその冷たい血面に力のない視線を落としていた。

「茜に教えたよ、俺のこと」

「……ええ、わかってます。怒ったりしませんよ」

それはわかってる。桔梗が怒っていれば今俺はここにいないってことくらい。

「さ、帰ってご飯にしましょう。もうできてますよ」

「ん、楽しみだ」

「先にお風呂入ってくださいね、少し臭いますよ」

——こういったことは昔からあった。本当に肅清対象になるような覚悟をした人間が、そんな簡単に証拠を残すような真似はしない。だからこそそれが可能な人間が矢面に立たされる、というのは日常

茶飯事だった。

だからこの殺しも次の日には日常に紛れていく。死体処理がされたあと、この程度であれば報道されるようなことすらない。クラスメイトは身体と共に周囲の記憶からも風化していつて、いずれ誰も知らない、この世にいなかった人間として扱われていくはずだ。本人もそれを覚悟していただろうと思う。

——何の慰めにもなりやあしないが、俺は少なくとも忘れないぞ。名前は知らんけど、俺が殺した陽炎がいたってことくらいは。

それが即ち俺の「抛り所」。「忘れてもいい」と言うすべての人間を、俺は今まで覚えていたことがない。言葉だけはいつまでもいつまでも、しこりのように胸に残っているのに——

つづこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6779j/>

聖女の丘

2010年10月15日21時03分発行